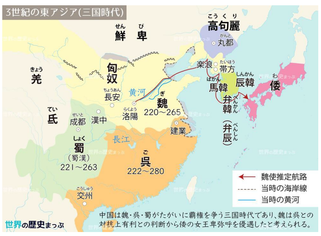
纏向紀行

奈良県春日市に纏向遺跡はある。筆者は今夏に纏向を訪ねたが、そこには、よく知られる前方後円墳「箸墓古墳」がある。この後に訪れた佐賀県の吉野ケ里遺跡とは随分と雰囲気が違う。その違いを感得する為にフィールドワークはあるのだが、吉野ケ里は環濠集落で「環濠」による防備がなされている弥生時代の国である。

しかし纏向遺跡は、大和川を下って大阪湾に開かれた弥生時代の国で、環濠は無い。邪馬台国は北部九州説と近畿説とがあるが、本来なら、この二つの地域に君臨した国は、異なる国として存在したとみるのが常識であろうと筆者は思う。

中国に魏、呉、蜀の三国が鼎立していた時代を三国時代というが、中国側から見れば、三世紀頃の日本は「倭」と呼ばれていた。



「倭国」は統一王朝ではなく、連合国家であったようだ。魏志倭人伝によれば、百ケ国程度の国があったようだ。日本列島に散らばる中国の古鏡の出土分布をみれば、様々な倭国の小国が独自に中国と交流を図っていたと考えるべきだろう。

仏教は呉を版図とする地域から日本に伝わったが、僧職者は今の和服のような服装をしていて、今日でも「呉服」という衣料品を指す言葉として残っている。海流を読めば、三国時代に呉からの海路もあった筈で、魏志倭人伝にも薄っすらと、恐らくは戦乱で追われた人々が倭国に渡来してきた形跡が読める。その一つに有明海から上陸した一群があったと筆者は考えている。

さて、邪馬台国がどこにあったのかという議論では、倭国があたかも統一王朝であったかの様な前提にたっている。便宜上の名称を付せば、北部九州に邪馬台国があり、近畿に大和国があり、日本海側に出雲国という主要な連合国があったとみるべきだろう。

その後、日本列島では東北地方を除き、統一の動きが出る。

日向から北上して畿内に至る「神武東征」により、纏向遺跡がある橿原の地に王朝が建てられたのである。

地政学的には、奈良の橿原王朝は大阪湾から瀬戸内に勢力を維持し、東方は雲出川から伊勢湾に勢力を伸ばす統一的国家になり、後代、朝廷と称するようになる。

纏向は往時も農村である。しかし橿原の都には全国から人々が移り住んだ。各地方の土器が出るからそれが分かる。この地は律令国家の中心となるが、今も歩けば美しい邑である。奈良盆地には、往時は湖があった。野鳥が飛来するので「飛鳥」と歌に詠まれた。

今和五年十二月二十は知日

大中臣正比呂　記

補注、

現在、中華人民共和国として統治下にある地域は、日本では、１９４６年６月の外務省通達により、「支那」という名称を避け「中国」と呼称することになった。

中華人民共和国政権(中共共産党政権)の前政権の中華民国では、建国の父、孫文は「支那」と自称しているので「支那」は必ずしも「邪馬台国」のような蔑称ではないが、次の蒋介石政権では、その呼称を嫌って「中国」を用いている。

歴史上の用法としては、平安時代にはすでに「支那」という地域名称が使われており、国名に相当する名称としては王朝名を用いている。従って、王朝名と時代を同じくする地域名称は「支那」と表現すべき場合もあるが、今日の歴史記述では、歴史観の表現を伴わない場合は「中国」とする。

近代史では、朝鮮半島と中国の政権の歴史観が反日政策を取っているので、その政策に対抗した地域名称を敢えて採用しないという方針を、日本国政府も、歴史学会も取っている。更に、他国における歴史観を含む微妙な通称もあり、例えば、ロシアでは漢族の北狄や契丹に由来して、中華人民共和国を「キタイ」と呼ぶような事情も考慮に入れていない。